

最優秀作

主とともに —核廃絶、わたしの責任—

重政 優

盈進学園高等学校 2年 (広島)

「ヒロシマを考えることは、核戦争を拒否し、平和に対して責任を取ることです」

1981年、ローマ法王ヨハネ・パウロⅡ世が広島原爆死没者慰霊碑前において、核兵器廃絶を訴えた「平和アピール」の一節だ。私は、広島に生まれ育つ者として、広島と長崎の悲劇を記録し、伝えていくと決めている。

私は高校一年から、核廃絶の署名活動に参加している。炎天下(*under the blazing sun*)も雪の舞う日も街頭に立ち続けている。「『世界平和の日』教皇メッセージ」にあるように、暴力はこの壊れた世界に対する解決策ではない。私は、人類生存と世界平和の実現に向け、核兵器という「暴力」をなくすために、私のすべてを主に捧げる。

「署名なんて意味がない」「核抑止こそ平和を保つために必要だ」。署名活動中、こんな言葉をもたらすこともある。それでも私は、被爆者の「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない」という復讐と敵対を超えた理念で崇高な平和への願いを胸に刻み、活動を続ける。‘*Small is beautiful*’。私が大好きな言葉だ。私という小さな存在と、私につながる小さき人びととの連帯が、必ず、大きな環となって、世界を変える、と私は信じる。

私の母はフィリピン人だ。幼い頃から「ハーフ」(*half*)と呼ばれた。肌がすこし濃いことから、「汚い」などと言われ、いじめられた。それが悲しく、母のことを隠すようになった。教会にも、母と一緒に通わなくなった。そうしたある日、教会で神父さんと聖書の勉強をしているとき、次の一節が目飛び込んできた。

「イエスは神の無条件の愛、受け入れてゆるす愛をつねに説きました」

母の顔が浮かび、涙ぐむ自分がいた。母の名はマリア。25年ほど前、一人で海を越えて日本に来た。言葉も通じず、たくさんの苦労の中で私を産んでくれた。そして、これまでずっと、私を無条件に愛し、育ててくれた。

「家族を愛してください」。「世界平和のためにできることは何か」という質問に対するマザー・テレサの答えだ。私は、尊敬する彼女の答えに跪き、祈った。核廃絶を願って平和活動する私が、最も身近な家族との“平和”に気づくことができなかつたのである。母を受け入れず、遠ざけた自分を責め、悔いた。

同時に、私の世界が広がった。「半分しかない」という意味で「ハーフ」と言われ続けて来たが、「フィリピンと日本の二つもある」という「ダブル」(*double*)で生きていくと決心した。主はきっと、「ダブルの私にこそできること」を授けてくれると、私は信ずる。

私は将来、私と同じように、肌の色が違ったり、宗教や性別や習慣が違ったりして、悲しい思いをしている世界中の人に寄り添える人になりたい。世界には、政治的紛争や経済格差などで、恐怖に耐えながら暮らしている人がたくさんいる。母から無条件の愛をもらってきた私は、主とともに、どんな人にも愛を持って接する人になりたい。そして、人類の平和に対して責任を果たす人になりたい。

最優秀作

小さな平和

加藤 甫

青森県立弘前高等学校 2 年 (青森)

「お前って本当にぼっち(・・・)だな。ザオンリーワンって存在だよな。うん、お前ってやばい、みじめ。」

同級生数名がにやにやと笑いながら私の反応を待っていた。傷ついた様子をしてはいけない、彼らの望む反応をしてはいけない。精一杯平静を保っていたけれど、言葉の暴力に心は内出血していた。

他人をからかって、傷つけて彼らの何が満たされるのだろうか。悔しい気持ちは徐々に怒りや憎しみに変化していく。

「やられたらやりかえせ。」そう私にアドバイスしてくれる人もいた。やりかえさないことは弱さだという。「やりかえさないから、やられっぱなしなんだよ。相手にもぐさっと言ってやるべきだ。」と。そうかもしれない、とも思う。私は弱いのだろうか。

自分の心がこんな風に憤りや迷いでいっぱいになる時、心で噛みしめる言葉がある。ケント・M・キースの「逆説の十か条」だ。

「人は不合理で、わからず屋で、わがままな存在だ。それでもなお、人を愛しなさい。(中略)正直で素直なあり方はあなたを無防備にするだろう。それでもなお、正直で素直なあなたでいなさい。(中略)世界のために最善を尽くしても、その見返りにひどい仕打ちを受けるかもしれない。それでもなお、世界のために最善を尽くしなさい」(ケント・M・キース、2010、大内博訳)

私はこの詩を紙に書き留めて机の前に貼っている。後に調べたところ、マザー・テレサもこの言葉に出会って感動し、カルカッタにある孤児の家の壁に書き留めたそうだ。辛いとき、悲しいとき、私と同じようにこの詩を何度も眺めたのだろうか、とマザー・テレサの優しい眼差しを思い浮かべながら思う。私はこの詩の、すべてを恨まず許し、より大きな慈しみで自分をも他者をも包み込むところが好きだ。大きな善の力を持つこの詩を噛みしめると、負の連鎖を断ち切り、誠実さと敬意を持って、私を取り巻く世界とまた向き合おうという思いに至る。心の内出血は押すとまだ痛いけれど、触らないと平気だ、数日で治るだろう、と立ち上がれるのだ。

私は私を傷つけた人たちを許し、未来に向けて歩いていきたい。彼らも苦しいはずだ。相手に向けたはずの憎しみの矛先は、なぜか自分を傷つける。相手を許すことは自分を癒すことでもあり、相手を愛することは自分をも幸福にすることなのだ。他者への許しや慈しみを心の中に持つことを、小さな平和と呼ぶのだと私は考える。そして個人の力は、思っているよりずっと大きい。国家も、民族も、もとは個より生じている。小さな平和を集めて大きな平和に繋げていけばよいのだ。

2017年「世界平和の日」教皇メッセージの中で、教皇フランシスコは、非暴力は降伏すること、かわからないこと、受け身であることではなく、むしろ「あわれみと非暴力は生き方の指標となる本質的な要素」である、と述べられている。私は非暴力の道を歩いていこう。やり返さないのは弱いからではなく、平和の作り手になりたいからだ。

最優秀作

隣人から世界平和へ

石井麟太郎

六甲学院高等学校2年(兵庫)

昨年の夏、私は学校の行事でインドを訪れた。十日間の滞在の中で私が平和について深く考えるきっかけとなる体験をしたのは元ハンセン病患者の方々のリハビリ施設を訪問したときのことだった。

この施設で暮らしている方々はハンセン病を患った過去を持っており、社会からひどい差別を受け、さらには家族からも見捨てられた方もたくさんいた。人間にとって家族は一番の理解者であり、辛いことも一緒に受け入れてくれる唯一無二の存在だ。その家族に見捨てられた人びとの嘆きはどれほどのものだろうか。とても言葉では表すことのできないほどの悲しみ、苦しみを味わっただろう。しかし、彼らと握手したときに感じたのは怒りでも悲しみでもなく、人の温かさだった。ごつごつしているが、温かい手だった。私は今は非力で、できることは少ないけれど、この体験を忘れず、いつか差別や偏見によって小さくされた人に寄り添って生きていける世界の実現に貢献したいと心に誓った。

私は宿に帰り、この日の体験したことを振り返った。そして私は家族というものについて考えているうちに、あることが心に浮かんだ。それは私の母についてのことだ。当時、私の母は乳がんを患っていたのだが、割合に元気で家事も一見普通にこなしていたので、食事や洗濯などの世話になることを当たり前だと思っていた。しかし、それは違うと気付いたのだ。薬の副作用で髪は抜け、家事の間は横になることが多いのに、母が元気と言っているから元気なのだろうと都合よく考えていた。こんなことは頭ではわかっているはずなのに、日本から遠く離れたインドでは家族から見捨てられた元ハンセン病患者の方の苦しみに思いやりの気持ちが持てるのに、一番身近で苦しんでいる母に対しては鈍感だったのだ。

平和というものも同じだと私は思う。人は遠い国の戦争には関心を持って、身近に起きている些細なことには気付くことができない。その身近に起こっている些細なことひとつひとつに気付くことが平和への第一歩ではないだろうか。となりで泣いている人がいるのに自分は笑っていられるだろうか、ということが平和の本当の意味だと私は思う。自分の身の回りを平和にしようという気持ちを世界中の人が持てば世界は平和になるはずだ。すべての人が誰かにとっての最愛の存在なのであって、泣いていてよい人などいるはずがない。世界中の人がこのことに気づき、自分も他の人もみんな愛されるべき存在なのだと自覚すれば、人はもっと素直に、もっと幸せになれるのではないだろうか。

世界平和など無理だという人がたくさんいる。でも、そんなはずがない。同じ世界に生まれてきた者同士、私たち人類、いや生きとし生ける者はみな分かり合えるはずなのだ。

最優秀作

「祈り」が世界を平和にする

戸川 馨

田園調布雙葉高等学校 3 年 (東京)

愛と祈りに溢れる非暴力の世界。そのような世界を私は心から望んでいる。そして同じ平和を志す日本とバチカン市国だからこそ、両国はその実現に貢献できると信じている。

私は父の仕事の都合で、アメリカのワシントン DC 近郊に住んでいた経験がある。ある日、在米日本大使館を訪れた私はその日以来戦争と平和とは何かを真剣に考えるようになった。大使館では第二次世界大戦時に日本が宣戦布告の文章を作成したとされるタイプライターを目にしたのだ。多くの罪のない人々の尊い命を奪い、悲惨な歴史を生み出したそのタイプライターを前にして、私は身が震える思いがした。その時私は「被害者」としての日本だけではなく「加害者」としての日本を突き付けられた気がした。そしてもう二度とあのような悲しい過去を繰り返さないために、日本人として平和な世界を作るための懸け橋になりたいと強く決心したのだった。

幼稚園からカトリック校に通う私は、幼い頃からキリスト教の教えや神様への祈りの時間を大事にしてきた。毎朝の聖歌の時間や帰宅前のお祈りは、今では生活の大切な一部だ。祈りはいつでも私に心の安らぎと平和を与えてくれる。毎日少しの間でも手を合わせ、心を落ち着かせる時間。目の前の慌ただしさから一瞬離れて、大切な人や世界に思いを馳せる時間。私は世界平和の原点はここにあるのではないかと感じている。自分だけの小さな世界を越えて他者に向かう祈りは、地球上のどこに住んでいてもできることだ。「祈りの心」は、全世界の人々に平等に与えられた平和への道しるべなのではないだろうか。

悲しいことに、世界中で戦争や暴力が起きているのは事実だ。私がこの作文を書いている今でも紛争やテロ、貧困により多くの人のかげがえのない命が奪われている。しかし、私は世界平和の達成は決して遠く離れた夢物語ではないと思う。なぜなら、平和の出発点は私たち一人ひとりの中から始まる「祈りの心」であり、暴力に訴えない精神こそが平和を作り出す源であると信じているからだ。つまり平和とは「訪れる」ものではなく、自分たちで「作り出していく」ものなのだ。

それでは国や民族、宗教の違いを越えた平和は暴力や武器なしには作り出せないのだろうか。私は、そうは思わない。武力ではなく叡智を働かせ、祈りと非暴力を広めていくことが平和作りへの第一歩であると、十年以上のカトリックの学びが教えてくれた。侵略戦争を経て敗戦国、そして唯一の被爆国である日本と、カトリックの教えに基づくバチカン市国。両国はお互いに平和の素晴らしさを深く理解している。私は日本とバチカン市国が祈りの心で世界中と分かち合い、平和を作り出していく先導者になることを願っている。

私の好きな聖歌の中に「私をあなたの平和の道具にして下さい」という歌詞がある。この言葉を体現するために、自分も祈りの心を通して、平和な世界を作る担い手になりたい。